
どらごんすとりー

0 ~ マル ~

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どらごんすとりー

【Nコード】

N0028D

【作者名】

0ゝマルゝ

【あらすじ】

主人公アルは人竜の住む謎めく村で虚弱な美少女アイラと出会うが、アルはその村から見れば侵入者だった。しかしアイラは自分を助けてくれたアルの移住を認めた。アイラは他の住民からアルの正体がバレないようにフォローをし、アルは虚弱なアイラの御守りをすることに！アルはアイラを通して仲間たちを増やしていく。アルの正体がバレそうになり冷や冷やする場面もあるが、ストーリーはほのぼのと展開されていく・・・が、ラストに起こる最大最悪の事件が起きることをアルは知る余地もない。謎めいた山には不思議がい

っばい！ほのほのでシリアス？なドラゴンファンタジーここに開幕
(作者より：もうすぐ更新します。)

01 【プロローグ】

01 【プロローグ】

く ● どんぐんすとりー ● く

この物語は一人の少年が冒険する話である。

アルは今旅をしている。

あてもない旅だ。

“ たった一つのモノ ” を探し出すために、アルは故郷である村を飛び出したのだ。

世界は今戦争時代であった。

革命という言葉が民間に広まってから、紛争やら戦争やら革命が絶えない。

経済には大きな差があるといえる。

この世界の中心部は産業も大いに発達し、言わば都会。

しかし一歩中心から離れるとそこは大自然である。

だが大自然の中にもちゃんとした生き方があった。

農作で栄養のある食物を育て、漁業も田植も盛んである。

彼らの暮らしの中で電気や石油など必要がなかった。

金、経済が全てではなかったのだ。

アルは先が見えない高原をひたすらに歩いていった。

目印は白色のスカーフ。

今時の若干長めのセットされた髪に乘せられているメガネ。

茶色い、西洋劇に出てきそうな半袖のジャケット。

大きく十字架の描かれたＴシャツ。

長ズボンと半ズボンの間くらいの長さのズボン。

顔は格好良いが、可愛いともとれる。

そろそろ喉が渴いてきたそんなとき。

アルの目に映ったのは広大な山だった。

まだ遠くにあるが美しさがはつきりと分かる。

濁りのない湖。

果ての見えない森、林、木。

ブルーの空に転がっている羽毛のような雲。

そして高くそびえたち、噴火をしそうでしない自然の象徴を感じさせる山。

火の気が見えないところから、どうやらその村は戦争、紛争とは無縁のようであった。

遠くにいるのに、空気がおいしい。

思わず深呼吸したアルは自分の真上を飛ぶ鳥を眺めてほほ笑んだ。

「・・・探し出せると」いいんだけどなあ・・・でも・・・なんかワクワクするねえ・・・」

——この山での冒険がまさかあれほどまでに残酷なものに

なろうかと知る余地もなく、アルは遅くなっていたその足を少しづつ速めていった。

そう、この山にはドラゴンが住んでいたのだ。

アルの冒険は今始まった。

01 【プロローグ】（後書き）

作者の〇〇マルです。

どうぞよろしくお願いします。

02 【人竜との出会い】

02 【人竜との出会い】

く ● どんぐんすとーりー ● く

堂々とそびえたっている山になかなか着くことができずにアルは息を切らしていた。

それほど山が大きいのだろう。

山に近づいたたびに「空気って味があるんだなあ」と感じさせていた。息を切らしながらも歩調は崩れることなく少しずつ山に近づいて行つたのだ。

「やっと着くな……。早く……。早くあの景色を間近で見てみたいねえ」

歩くこと3時間。

やっと着いた山は想像を絶する大きさとなっていた。

湖は底が見えるほど澄んでいて、森には青々とした木がそびえたたっている。

空はアルを歓迎してくれているかのように快晴。

だが、やはりその景色は山の景観に勝てることはない。

赤みがかった茶色の緑無き山は今にも噴火する様子で存在し、てっぺんがまるで見えない。

その山がこの一帯を囲んでいる。

そしてどうやらこの土地には人間が住んでいるらしい。

次に目に映ったのが水田だったからだ。

その水田にカカシはない。

まずアルは人を探すことに決めた。

ふと周囲見れば、弥生時代に見られそうな家がぼつぽつと建っている。

一番近い家にアルは歩み寄っていった。

「ごめんください。あのお、誰か、人はいますかあ？」

すぐに奥の方から人らしき影が見えてきた。

そして近づいてくる。

——男だ。

「あの、すみません、この山に初めてきたもので——」

「……っ！……うわぁ——っ！」

絶句の後、彼は絶叫した。

もちろんその理由をアルは知るはずがない。

「あのお……」

「去れ……！去れ……！！！」

アルはそれでも話しかけるのをやめなかった。

第一何故自分が拒否されているのかが分からなかった。

だが、その直後……アルも絶句したのである。

男の肩の内側が骨のようなものがグイグイと伸び、それは肉を突き破った。

それは骨ではないようだが、骨に似ているものとしか表現ができない。

漆黒の骨のような物体は大きく伸び、そこから翼が開いた。

顔の骨格が大きく変化し、眼はつり上がり、口は大きく開いて、歯は鋭く尖った。

腕や足の筋肉は人間の3倍ほどの大きさになり、いつのまにか尾っ

ぽのようなものでついている。

—— 気付けば目の前にはドラゴンらしき生物が立っていた。

「シャアアア！！グルグルル・・・！」

赤く染まったその眼はアルを威嚇しているようにしか見えない。

アルはその両手を上に挙げて謝罪の言葉を繰り返した。
だがドラゴンはそれを聞きとろうとしていなかった。

—— 故に、アルは逃げた。

「はぁ・・・はぁ・・・なんだよ・・・竜って・・・今のはなんだ
よう・・・！」

アルは意気消沈した。

ため息も出る。

それでもくじけずにアルは他の家をあたることを決めていた。

気温が少し熱くなったように感じ、上を見上げれば太陽がアルを照らしていた。

足取りが重くなっている。

頬に汗が垂れてくる。

だがついさっき起きた出来事を思い出すと寒気が出た。

人間がドラゴンに変わったのだ。

それはアルには到底理解など不可能なコトである。

下を向きながら歩きはじめたその時であった。

ダッツツ・・・！

大きな音とともに一人の人間がアルの目の前に吹っ飛ばされて倒れ込んだ。

女の子である。

恐らくアルよりも年下だろう。

その子は苦しそうな表情をし、アルを見上げて「助けて下さい」と一言だけ言った。

それが、アルとその子の出会いであつた。

03 【アイラという少女】

03 【アイラという少女】

く ● どころこんすとーりー ● く

歩いているアルの目の前に現れたのは少女だった。
何かに叩きつけられたのかその子は吹き飛ばされて、アルの周辺付近は一瞬のうちに大きな砂ぼこりをたてた。
そして苦しみを露わにしたその表情で一言告げた。

「助けて下さい・・・」

アルは砂ぼこりを手で払い、その子が飛んできた方を見上げた。
太陽の光が目をくらました。

それでも必死に眼をあけていると視界には“ついさつき見た姿”が入ってきた。

ついさつき見たのとは異なるが、間違いなくドラゴンである。

群青色に輝く光沢の皮膚をまとうて、翼を大きく広げアルの方に向かってきている。

いや、その子の方に向かっていているのだろう。

そのドラゴンはまだ遠くを飛んでいるようだ。

ならば、その遠くの距離からこの子は飛ばされてきたとでもいうのか？

アルはその子に目を落とした。

「どうしたの？何があったあ・・・？」

「命を狙われていて・・・お願いっ！助けて・・・！」

その子はまだアルを見ようとしなない。

両目を強くつぶっていることもあって、一回もアルを直視していない様子だ。

その行動から、そのダメージの大きさを物語っている。

「命・・・って・・・！！」

「詳しいことはあとで・・・今は・・・すみません・・・体が思うように・・・動かなくて・・・」

「分かった。あとで僕の方も少し聞きたいことがあるからその話も聞いてもらうね。名前はあ？」

「アイラ・・・早く・・・早くしないと・・・もうアイツが来ちゃう・・・！！」

「——アイラ・・・か！大丈夫だよ。ちゃんと掴んでねっ」

アルは頼りなさそうな口調でそう言うアイラと名乗った少女を抱きかかえた。

そして——

サツツツ・・・

アルの足は高速回転し始めた。

動きが見えないほど速いその足は大きく土を蹴り出した。

アイラが飛ばされてきた時にできた砂埃が再度現れた。

その直後アルは風を切り、広大な荒野を走り抜けてた。

少し長めの髪が揺らぎ、アイラは片手でアルを掴み、片手で髪を直すような仕草を取った。

「掴まってっ！そんなことしてると飛ばされちゃうよ・・・？」

「・・・うん・・・あなたはいっただい・・・」

「アル。僕の名前はアルっていうんだ」

「・・・アル・・・・・・・・・・」

砂埃がたつてから数秒後にやっと追手のドラゴンはその場に到着していた。

ドラゴンが羽を震わせ、大きな風が吹き、視界が晴れた頃にはアルとアイラの姿はもう無くなっていた。

アイラの命を狙っているというドラゴンは辺りをキョロキョロと見まわした。

都会で見られるような建設物がないこの場所で、その二人の姿がどこにもない。

その竜は地面を蹴って豪快な溜息を吐き、大空へと羽ばたいていった。

竜がいたその地面には真新しい亀裂が入っていた。

その頃アルはアイラを抱えて走り続けていた。

アイラはアルの服をぎゅっと掴んでいるものの、今にも吹き飛ばされそうな勢いであった。

「もう・・・もう追っ手は来てないっ！良かった・・・！」

アイラがようやく落ち着いた声で発したその一言を聞いたアルは足を止めた。

もちろん足を止めた瞬間、砂ぼこりが立ち上っている。

そしてアイラを抱きかかえている両腕をそっと放した。

改めて、自分は男性に抱きかかえられていたと気付いたアイラは急に顔を赤くしてあたふたし始めた。

ここで改めてアルはアイラを凝視した。

顔は整っていて目はうるうるとしている。

細めの身体で15歳ほどの子であろう。

白くてレース生地の短めのスカートに上はジャケットといった服装をしている。

身長は低めで黒い靴下を履いているその足も細い。

首元には水晶玉のような水色で透明で大きな玉が1つ付いているネックレスが目立つ。

髪は若干長めで、ネックレスと同じ玉がついているヘアゴムで髪を縛っており、髪はいわゆるツインテールである。

——ぶっちゃけた話、可愛い。

だがアルは目の前に美少女がいる、ということに気にしてもいなかったし、むしろ容姿の良さに気付いていないようだ。

「名前は、アイラだっけ？大丈夫う・・・？」

「うん・・・！もう大丈夫だから・・・ありがとお・・・！足・・・

・速いんだね！」

「足だけが取り柄みたいなものだからさ・・・」

照れながらほつぺたを赤くするアルはなんと弱々しそうに見えた。

そんな様子をアイラは「ふふっ」とほほ笑んだ。

「いやあ、でもこの村は空気がきれいだからいつもより速く走れた気がするよ。この村っていいねえ！住みたいなあ・・・」

その一言がアイラの瞳を硬直させた。

向いている方向は一点。アルの首元である。

アルは優しく微笑み、「ん？どした？」など言っていて余裕の表情である。

それに対してアイラの表情はやはり凍りついている。

そしてアルの首の方を見ると両手で口を押さえて一歩二歩と下がっていった。

もう、その眼は“見ている”ではなく“睨みつけている”眼になっていた。

「・・・どうしたの・・・？」

「あなたも・・・私の命を狙っているの・・・？」

「・・・・・・・・・・え・・・・？」

「さっきの竜と同じように・・・・あなたも・・・・・・」

「

「僕がアイラを襲うわけないって！ていうか僕はあの竜とか初めて見たからねえ」

アイラが体を完全に震わせアル本人に恐怖を抱いているのに、アルは空気が読めないらしく明るく話しかけている。

アルは「大丈夫かな？」とアイラを心配しているほどだ。

だがこの状況下で、このアルの行動は幸と出た。

「え・・・・・・・・？竜について知らないの？」

「ああ、うん。この地に来るのは初めてでさ。アイラに出会う前に男の人に出会ったんだよねえ。でも彼の身体がドラゴンに変化していつてさあ・・・・。『来るな！』って避けられたんだよ。意味が分からないけど、あのドラゴン？竜？ってのは一体何なの？知ってる・・・・・・・・？」

アイラは一呼吸落ち着かせてからこう言った。

「・・・・・・・・知るも知らないもこの地は、“ドラゴンの村”よ。ここに住んでいる人は全て“人竜”なの。そう・・・・私も・・・・・・・・アル？驚かないでね」

するとアイラの骨が激しく動き始めた。

そして最初に出会った“人竜”のように骨が突き出し、羽が生え・

・アイラは真正正銘のドラゴンとなっていた。

白く輝く鱗ある細長い体に、羽が豪快に生えている。

それに引き替え手と足は若干小さめである。しかしその足と手の爪は鋭く尖っていた。

そしてその胸元にはネックレスについていた玉がついていて、それは同時に羽の関節部分にもついている。

だがその竜の姿にさつきまでの可愛らしさはなく、威厳に満ちた表情で頼もしく空に浮かんでいる。

アルが絶句していると、アイラは一瞬のうちに元の姿に戻った。

「ごめん・・・！怖かった・・・？」

「怖くはなかったけど・・・驚いたよ・・・すごい・・・格好良かった・・・！」

「良かった・・・。アルは、本当に竜のこと知らないんだねっ」

「ああ・・・うん。というかさ、なんで最初にあった竜も今さっきのアイラも、僕の存在を怖がるかが分からなくてさ・・・僕、何か悪いことしたかな・・・？それともこの村に何かあるのかなあ・・・？この村に入っちゃいけない理由でもあったりするのかなあ・・・って。それとも僕が受け入れられないだけだったり・・・」

アイラは眼を閉じて小さく笑った。

「別にあなたが嫌われているわけじゃないよ・・・」と一言囁いた。その眼がゆつくりと開き、青々とした空を見上げた。

「少しだけ、この村のことを話すね。この村に居たいでしょ、アル？この村・・・綺麗でしょ。水も、空気も、緑も、何もかも・・・」

「・・・うん。綺麗だ」

アイラはこの村について話した。

04 【ほのぼのなとき】

04 【ほのぼのなとき】

こうしてアイラとアルは出会った。

アルはこの冒険がさらに楽しめるな、と意気揚揚であった。

「この村のことを少し話すね！」

さつきまでは冷静な表情をしていたが、突然アイラはにっこりと顔を緩ませた。

「この村はね、この通りすごく居心地がいいからみんな住みたがるんだ。」

大したことを話すわけではないのだなと思い、ああ、そうだね。とアルは答えた。

「だから——この村に住もうとする人や竜がたくさんいるわけ。でもこの村には約束事があるんだよ。“この村には許された者しか住んではいけない”ってね。許された者以外は不法侵入者として、厳罰が与えられてしまうのよ。住居を奪おうとしている、と見なされてね」

「そうだったのかぁ……。僕は別にそういう意味はなかったんだけれどもなぁ……」

「私、びっくりしちゃったよ。この村、山の奥の奥にあるからほとんどの人が入って来れないのよ。空を飛んでいけるような竜でないとね。ここに来るまで、とても長かったでしょ？」

「すごく長かったよお。見えてただけだねえ」

この言葉にアイラは眼を見開き、ちよつとばかり後退して驚きを見

せた。

「え！？見えてたの・・・！？アルって視力・・・いくつ？」

「4・0かなあ。僕の地元では悪い方かなあ・・・」

「嘘・・・！信じられない！その頭にかけている眼鏡は一体何なの？」

アルの地元ではどうやら6・0の視力が普通らしくアルの眼鏡は6・0であるが、真実を言つと何だかアイラに引かれそうな気がしたアルは5・0と偽ったが、結果は同じだった。

「・・・私なんて0・5だよ・・・。ここではいい方なんだけどな・・・」

竜なのだから人よりも視力いいと思っていたアルはほんの少し興醒めする要素となつてしまつたが「竜になったら2・0はあるよ」の一言で頭の中の前言を撤回できた。

「まあ、そういうわけでこの村は厳戒態勢なのよ。それでね、この村に住むことを許された者には“ある目印”が与えられるわけ。それでみんな判断してるのよ。・・・さっきの竜にはそれが見られなかった。きつと私の“目印”を狙つて襲つて来たのよ」

そういうとアイラはビシツと人差し指でアルのスカーフを指した。まさに効果音は「じゃーん」といった感じであろう。

このポーズをとりたかつたのかどうなのか分からないが、アイラは自己満足したみたく、満面の笑みが零れた。

「え？スカーフがどうしたん？」

「首元にね、“この地に住む者のマーク”をつけなくてはいけないんだよねっ」

「じゃあアイラには・・・」

「私はこの水晶玉のネックレスの部分にマークがあるんだよ。ふふふ！この金色に光る三角の宝石みたいなのだよ！」

アイラの首元をよくよく見ると水晶玉の両端にその宝石が埋めてあ

った。

とても子どもが身につけるようなネックレスではないと思ったが似合っているのに気がしなかった。

視力0.5で見れる大きさなのか、これ。と突っ込みたい気分であったがアルは無駄なことは言わないで置いた。

「これかぁ・・・綺麗・・・！でも僕は当然持つてないよぉ・・・」

「それがね、私は実は一つ持つているのよ。安心して。持つてればいいの。でも自分が竜じゃないとバレると侵入者から狙われやすくなるから、アルが普通の人間だつてのは私とアルの秘密だよ」

「うん、分かったぁ。よくそんなすごい宝石を二つも持つてるね」

「まっ、そんな小さいことは気にしないでっ！ウチに行くよ！」

「うっ、うん・・・！」

アイラがアルの手を掴んで前に進んだ。

2人の口は閉じることなく自然豊かなこの地を進んでいった。

アイラが得意気に村を紹介し、アルはその一つ一つに感動している。

「この花、綺麗だね！僕のいた世界ではこんなの見れなかったんだよぉ」

「この花は“美愛花”（びあいばな）っていうのよっ！もう名前の通り花言葉は『美しい愛』なんだよっ！私も・・・この花を運命のヒトに渡したいなぁ・・・」

・・・

しばらくしてアイラはこの“間”に気付いた。

「こんなこと言わなきゃ良かった」と言わんばかりに、アイラはまた顔を真っ赤にして俯いた。

そんなアイラにアルは微笑んだ。

「っ！でもやっぱりこの花はすごい綺麗だね。アイラの気持ちもよく分かるよぉ！」

「……って……！何よその顔はつつ！まあっ？？この山を離れるとこんな綺麗な花はないんだからねっ！この村一帯がすごいよっ！ふんっ」

顔を赤く染め、誇らしげにアイラは語っていた。

大分恥ずかしかったためか会話が繋がっていない。

そんなアイラに対し、やはりアルは微笑んでいた。

その後もこの村の説明は続いた。

1つ1つの説明に自信を持って話すアイラは心からこの地を愛しているように見えた。

——歩くほど10分。

そこには最初に見たような弥生時代を感じさせる家があった。

だがその家の大きさは他のものよりは若干小さい。

「ここがウチよ」

家の中は木のぬくもりを感じさせていた。

食卓に使うであろう机が真ん中にあり、奥には木製の台所がある。

流しだけはステンレスのような金属で被われている。

隅には木でつくられた風呂場があり、温泉のようである。

あとは鏡台とタンスがあつて女の子の家らしさをかもしだしている。

その横にあるのがベッドで、ふわふわとした薄ピンク色の掛け布団がある。

それよりも女の子らしいのが、家の中がガーデニングで花や草でいっぱいなのだ。

もちろんその花々はアルにとって目新しいものである。

お花畑のような家にアルは圧巻されていた。

「すごい……！この家！僕の地元にはこんななかったよ……！」

「ありがと。でも割りと他の家もこんなもんよ。まあ、机で少し腰を掛けててね。お茶いれるから」

せかせかとアイラが台所に向かっていった。

アルはやはり家のガーデニングから目を離すことができなかった。その景色は色とりどりで、少し視点を変えれば新しい発見がいくつもでてくる。

ずっとこの村にいてもよい。

そうアルは思えてきた。

「あ、そうそう。アルはなんでこの村にやってきたの？」

台所の方からアイラの声がした。

お茶をついでいる音も聞こえる。

「ああ——それは……とりあえず冒険したかったから……
・かなあ……」

「じゃあ、この村もいつかは出るってわけか……」

「まあいつかは出るだろうけど、だいぶ長居させてもらっ形かな」
「ありがとっ」

アイラに話しかけられるまでアルは冒険をする理由をも忘れるほどアイラの家に関心していた。

が、会話が終わり、部屋が静かになるとアルの頭の中は別のことで埋め尽くされた。

アルが冒険をする理由——それは兄を探すこと。

アルの口からたびたび“地元”という言葉が出るが、アルの地元は滅びた。

戦争が1つの小さな村を全壊させたのだ。

その敗北の原因の一つが、兄の失踪。

兄が戦争の真ただ中ではなくなりさえしなければ、被害を減らすことができていただろう。

戦争を放り投げてアルは兄の姿を探しに村を出た。

村の周辺に兄は見つからず、もう一度村に戻ると全焼した酷い村が広がっていた。

絶望し、生きる気力もすぐには湧かなかったが、兄はこの戦争では死んでいないということだけは知っていた。

きつと兄はどこかで生きている——そうしてアルは旅を決意したのである。

この村で長居する理由はこれといって大きなものはないが、アルの地元から一番近い——さらには居心地の良い村なので兄がいる可能性は高いとも思えたからだ。

欲を言えば、アルにはここで友人を作りたいという願いもあった。

「お茶、どうぞ。あ、もうそろそろ私のお友達がウチにくるからっ！楽しみにしててね」

「・・・あろがとう。このお茶美味しいなあ・・・！え？友達くるの？大丈夫う？」

「大丈夫だよっ！それまで花に水をやって待つてましょっ！」

「ああ・・・うん！」

アルは花に水をやるというコトに飽きることがなかった。

水をやると花が応えてくるかのように見えるのだ。

当然、水が花に当たって花が揺れるだけなのだ。

「花に水やりって飽きないんだよね。私、これが日課なもの」

「アイラはえらいなあ・・・ホント。お母さんもゆっくりできるでしょお？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

05 【アイラのお友達】

05 【アイラのお友達】

「花に水やりって飽きないんだよね。私、これが日課だもの」

「アイラはえらいなあ・・・ホント。お母さんもゆっくりできるでしょう？」

「・・・・・・・・」

どうやら地雷を踏んでしまったようで、アルは戸惑いを隠せない様子をもろに顔に出した。

そんな様子もアイラは下を向いているので目に映っていないだろう。しかし、最初に言葉を発したのはアイラだった。

「・・・なあーんて、もうお母さんのことは気にしてませんよ！私が小さい頃に亡くなっちゃったんだよね。まあ、だいぶ昔の話だからねえー。ごめんね、重くしちゃって！あ、そうそう！今から“首元に付ける目印”を渡すねっ！ちよっと待っててね！」

アイラは「ふふふ」と笑って見せた。

あまりにも嬉しそうに笑うアイラの顔はどこか寂しそうに見えた。

——まあ、当然だろう。

「はい、これ！この三角形の宝石。他の宝石じゃだめなんだよ。この“特別な宝石”じゃないとだめなんだよ。この宝石、見た目も他に類を見ない上に中には“特殊チップ”が内蔵されてるんだよ。“警察の笛の音”を吸収するはたらきがあるの。この音は通常の人が聴いたら一瞬にして気絶してしまう恐ろしい力を持っているの・・・

・。それを吸収するのがこの宝石に入ってる特殊チップなの。付け忘れたりするとたちまち犯罪者、侵入者扱い。でもこれでこの地域に住む人の安全が約束されてるの。以上！これは私からあなたにプレゼントよ！」

「ありがとう・・・！こんな大切なものを・・・嬉しいな・・・！」

ふとアルの脳裏には1つの疑問がよぎった。

何故そこまでして村の安全を守らなければならないのであろうか？ヒトなんて毎日のように風呂に入り、毎日のように服を着替える動物である。

当然、それを付け忘れる・・・なんてことなど日常茶飯事にあるだろう。

（少なくともアルの場合は間違いなく1週間に1度は起こり得る話だ）

もしも付け忘れ——笛が鳴ったのなら・・・

その人はその場で気絶し、目覚めた頃には犯罪者、侵入者扱いされているという事だ。

この村の習慣になれていないアルにとってそれは恐ろしく感じた。でも聞く必要のないことだと判断したアル手元にある宝石を慎重に首元に付けた。

「あ、この村にもともと住んでいる人が犯罪するってことはあり得ないのかなあ？」

「・・・有り得るけど、私が生まれてからそんな犯罪は起こらないんだよね。この村には足りないものがないから。犯罪する必要もないの。あと、この村って人が極端に少ないのよ。50人くらいしかないし。まあ、村は広いから全員の顔なんて把握してないけどさ」「少ないんだね。なんでもっとたくさんの人とこの村を共有しないのかなあ・・・？」

「あ、もうそろそろ私のお友達が来るよっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

「聞こえなかったの？今から私の友達に来るって言うのよ。まさか私に友だちの一人もいないとも思ってた・・・・・・・・？」

「・・・・違っよおっ・・・・！別にそんなんじゃないからあっ！でも僕なんかがいて大丈夫なのかな・・・・！ってさあ・・・・！ほらあ・・・・！」

「大丈夫に決まってるじゃない。まさか・・・・アルには疾しいことがあつたりするのかな？」

「ないよおっ！」

「冗談だよ、ははっ！」

アルは質問をはぐらかされたことに少しの不満を覚えたが、大した話じゃないことに気付いて割りけることにした。

ふと思えば、この村に足を踏み入れてすぐにアイラのような知り合いができ、認められ、さらには友達を紹介してくれるという事実。アルはちよつと良すぎた展開だとは思ったが、まんざらでもないのを受け入れることにした。

そんなときに早くも友人が到着したらしく、ドアの向こうで「ああーいらあー」と呼ぶ声が聞こえる。

呼び鈴がないらしく、大きな声でその友達は叫んでいる。声からして想像するに女の子である。

——女子の友達なのだから女子なのは当たり前だろう。

「レイラが来たみたい！アル！私のお友達っ！」

そついうとドアの方に振り向いて「今行くー」と大きく返事をした。アルは慌ただしく隠れようとしたが、アイラが「やっぱり疾しいことでもあるのぉ？」と細い眼を送ってきたので、アルはその場で正座することを決めた。

その様子を見たアイラは笑ったんだか苦笑だったのか分からない顔

を見せた。

「どうぞ。今日は新たなお友達が来てるんだよぉ」

「え？楽しみ！・・・おじゃまします。えっ・・・はっ・・・はそのきみい・・・！一体そこで何をしてるんだい！？ははっ！」
どうやらレイラと呼ばれるその女の目には、部屋の真ん中にある机の端でちょこんと正座しているアルの姿が映ったらしい。

その様子はいかにも間抜けで、レイラは初見の人にも関わらず突如笑いを見せた。

「何故正座しているんだろう・・・」と今頃気付いたらし、アルはあぐらをかく姿勢をとった。

「こんにちわ、アイラの友人のアルですう・・・。よろしく願います・・・！」

「へえ、やっぱし君のこと初めて見たよ。あたしはレイラ。よろしくね」

赤が軽く混じった薄茶色の髪は下の方で透明な玉がついているゴムで一つに束ねられている。

顔は生き生きとじていて明るい笑顔が絶えない。

女性の年は聞いてはいけない上に分かりづらいものがあるが、アルと同じくらいの年齢なのだろうか？

見た感じからして活発そうに見えるレイラは動きづらそうな白のワンピースを着用していた。

中には黒のＴシャツを着ているようで、胸元には赤いリボンを身に付けている。

当然、その上の方には“金色に輝く宝石”のネックレスが掛けられていた。

そして腰に赤色でエナメル性のベルトが締まっている。

ワンピースが太ももの中間あたりで真つ二つに分かれている。

これはきつとレイラが運動の邪魔になるから切ったのだろうな、と

安易に想像できてしまったので、アルは勝手ながらそう確信した。
くるぶしの高さの短い靴下は上だけが赤、靴は白のスニーカーである。

「れいらあゝ。座って座って。お茶入れるから」

「いつも悪いねゝ！今度はあたしが入れてあげるよ！私の方がお茶入れんの上手だけどねー」

「もうっ。ほら、お茶だよ」

「どうも、どうも、あざあゝすなのだよアイラくん」

そっとうとレイラは一気にお茶を飲み干した。

豪快な人である。

お茶のおかわりをアイラに頼んだが「ちょっと待ってて」と跳ね返されてしまったレイラはアルの方を向いた。

「んで、アルツハイマー君とアイラさんはどういう関係なんだい？」

「“ツハイマー”は余計ですよ」

「ちょっとしたボケさ。んで、どうなんだい？アイラくん」

アイラは片手にじょうろを持ち、花に水を上げながら顔を背けるようにして答えた。

「はうつ・・・んまあ・・・ちょっとした命の恩人みたいななんだよねっ・・・！」

「アイラっちは弱いもんなあ。一人になっちゃダメっていつも言っているのに。命は大切だよ、ホント。」

「・・・これからはアルと一緒に・・・いてくれるんだから・・・」

・・・と小声でアイラは言った。

その表情は花に向けられていてレイラの目には映らなかったが大体想像がついたらしく、

「へえゝ。」

とにんまり笑って、顔をアルの方へ再び移した。

「こりやまた重大任務を引き受けちゃったねえ、少年よ」

「ああ・・・うん。まあ、大丈夫でしょお・・・」

「頼りないねえ。ははっ」

「・・・失礼な・・・」

というかいつからアルはアイラのボディガードになったのだろうか？

・・・アルは竜ではない。

足が速いため、前回は竜から身を暗ますことに成功したが、長距離戦になつたら間違いなく翼を持った竜には敵わないだろう。

それに竜になつたアイラの姿を見る限り弱々しくはなく、逆に強そうにも見える。

そんなアイラはいつも竜から狙われ、弱いのであろうか？

アルは頭を抱えた。

「レイラさん・・・」

「レイラでいいよ。見た感じ同年だし、タメでいいよ」

アルが話したそうとしたがレイラが口を挟んだ。

「れっ・・・れいらあ・・・!」

「あたふたねえ」

間髪容れずにレイラが突っ込みを入れた。

「レイラあー・・・。アイラってそんなに弱いのお？」

「アイラン はね、たぶんこの村で最年少だからね。さらに竜になつても上手くコントロールできない。そういうことかな」

「そうなんだ・・・。じゃあ僕は割りと責任重大だねえ」

「割りとは余計だよ、アルアル」

ここでアルとレイラの会話は終わつたらしく、アルは胸をなでおろした。

レイラはお茶を飲もうとしたが先ほど飲み干したのでお茶が入っていないことに気付くと、コップの底をじいーと見つめてコップをテー

ブルに置き、指で軽くはじいた。
そしてアイラの方を向いた。

「あ、そうそう。フレイも来るからね。もうすぐ。あとさ、お茶おかわり」

「あ・・・僕もおかわりい・・・」

「便乗するわね」

「・・・っ」

アイラの友達“フレイ”とは一体どのような人なのであろうか？

06 【増えていく仲間】

06 【増えていく仲間】

アイラがお茶のおかわりをお盆に乗せてテーブルの前にやってきた。そのお盆の上には海苔がついたお煎餅が四枚ある。

きつとレイラが二枚食べるのだろう。

「で、レイラあ！本当にフレイが来るの？」

「来るって言ってたよ。子供は遊ぶことが仕事なのさ！」

レイラも十分に子供であるから堂々胸張って言う言葉ではない。

「あ・・・アイラあ・・・ふれいさんってのはどんな感じの人なのかなあ・・・？」

「フレイは男！力強くて頼もしい。ちよっぴりクールなところもあるんだよ。」

アイラの一言でアルは安心したようで、真っすぐ伸びていた背筋を曲げ安堵のため息をつき、すぐに目の前に出されたお茶に手を伸ばした。

「そのため息は何なのよ」

「・・・ずずず・・・」

お茶を飲んでいるアルは当然しゃべることはできない。

レイラは口を渋々止めた。

「アイラあ、ちなみにどれくらい竜が襲ってくるのあ？」

「ええと・・・。やっぱし、竜にも人間にも限りはあるからさつ、そんな多くないよ？ほら、警察の笛って毎日とか鳴らすわけじゃないけど、一か月に三、四回程度は鳴らすからさ・・・！竜とかも割りと計画的に狙ってくるのよね、侵入のタイミングを見計らって。だから襲われるってのは一か月に一回あるか無いかって程度だよ。

でもそのつど危ない思いしてるからね……。いつもみんなが助け
てくれるんだ。フレイが一番頼りになるんだよ！まあこれからはア
ルが助けしてくれるみたいだから安心かなあー？どうかなあー？」
アイラが少し挑発気味に言ったが、その口調はどこか可愛らしくて、
ついでに言えばどこか甘えているような感じであった。
そう言われたアルの顔には笑みがこぼれ、「頑張るよ」と言った。
否、正しく言えば“頑張るよ、”と言っておいた”の方が正しいだろ
う。

アルには毎回竜から逃げる事ができる自信はない。
最初に出会ったときに運良く、被害なしに逃げる事ができただけ
だ。

もしも次も綺麗に竜を欺くことができたなら、それはアルの自信へと
繋がるのだろうけど。

ここでアルはお茶を飲みながら、旅の根幹を思い出していた。
果たしてこの山にアルの兄はいるのだろうか？

しかし、たとえ兄がいようがいなからうがこの村に少しだけ長居さ
せてもらおうとアルは考えていた。

——アルはもともと友人の少ない方であった。
というかむしろ、いなかった、とも言える。

故に、地元が滅んだ…とはいえ元々アルの世代の人は少なかったた
め、滅びた瞬間は絶望したものの結局時間が経った今では精神的ダ
メージは無いといえる。

さらに同世代の彼らは皆戦争主義で、毎日鍛練に勤しみ交友をしよ
うとしていなかった。

（アルは戦争主義ではなかったがある程度の筋トレは積み重ねてい
たが）

同様に兄も鍛練を積み重ねていたため、アルは人との交流が盛んで
はなかったのだ。

この村にいれば友人ができるとアルは感じていた。
レイラのように元気すぎる人もいるが、拒否をしようとはしていない。

先程の“お茶作戦”では、レイラの反応が見たい…というのがアルの考えであつた。

レイラは口を閉じたためアルは内心で「勝った」と喜んでいたのである。

さらにアルはアイラの家にくるフレイという人とも仲良くなりたくな、とも思つてもいる。

アルの兄は今生きているのならは今を急ごうが急がなかるうが兄は生きていることに変わりはない。

戦争の相手村に拉致されていないことも確認済みである。

もちろん戦争の相手村に殺されるはずもないし。

兄を高く見すぎであろうか？とアルはたまに自問するが、やっぱりあの兄が易々殺されるはずはない…と自答していた。

あれだけ毎日の鍛練をしてきた兄のことだから、ふいに他人から殺されたり病に倒れることはないと信じていた。

——戦争中に消えたことには必ず理由がある。

そしてそれは兄の自発的な行動ともアルは推測していた。

今、この村に來たアルはアイラを助けるといふ義務みたいのを背負つたようだった。

自ら言い出したことではないが、本意ではなかった。

この村は自然が心地よいし、アルはしばらくこの位置を楽しもうと踏んだのだ。

コンコンッ

ドアをノックする音が聞こえた。

「今行きまーす！」

アイラは飛んでいった。

どうやらフレイのようである。

「どうぞ、座って座って！」

フレイと呼ばれる男がアイラの部屋に入ってきて来て、お茶が置いてあるテーブルは賑やかになってきた。

既にお茶は四つ置いてあり、アイラもみんなに混じって座った。

「フレイ！彼はアルっていうの。今日、竜から救ってくれた命の恩人なんだよおー」

アイラは隣りにいるアルの腕を肘で突いてアルに振った。

「あ…あっ…はあっ、初めまして…アルって言いますうつ…よろしくです！」

アルが声を震わした理由は目の前にいるフレイの整った顔にあった。男が見てもうつとりしてしまいそうな顔は「美しい」の一言に尽きる。

服装は薄水色チャイナ服である。

服に覆われているが、体格がしっかりとしていることがはっきりと分かる。

身長は高めであり、ストレートの髪は少し上に立っているがアルほどではない。

そして彼は何もかも見透かしているようだけど、温かさを持った目でアルの方を向いた。

「アル君って言うんだね。初めまして。俺はフレイっていうんだ…アイラを助けてくれたみたいだね。ありがとう」

その声は透き通った綺麗な声だった。

そういうとフレイは優雅な笑みを見せた。

どうたら無愛想ではなさそうだ。

「あのお…宝石はどこにつけているんですかあ…？」

ふとフレイを見ると首元に警察の笛から守り、住民の証である宝石が見当たらない。

まさかとは思うが彼は侵入者なのであるのか？とアルは首を軽くひねった。

「ああ・・・ここについてるんだ」

そう言いながらフレイは横向きになって自分の耳を指差した。イヤリングである。

「首元につけるって約束だけど、少し邪魔だね。耳につけたんだ」

アイラはアルの横で

「フレイって有名でみんな顔を知っているから、住民である目印を見えやすいトコにつけていなくても大丈夫ってなわけ。くれぐれもこの二人にも正体ばらしちゃいけないからね！」

と耳元で囁いた。

アルがこの村に初めて来た！というのはアイラとの秘密だということと思い出し少し焦った。

何故この二人にもバレちゃいけないのだろうと疑問に感じたが、この村はそういうことに関して厳密なんだな、と思って質問するのをやめた。

「でもまさかフレイを知らない人がまだこの村にいたとはねえ。ちよつとビックリだよ。“アイーラー1世”に会う前どうしてたんだい？」

当然こんな質問が来ることを想像していないアルは戸惑いを見せた。アイラもあたふたと慌て始めたが「そっか。アルう君はNEETだったわけか」とレイラが言ったので、ここは軽く笑って受け流すことにした。

話題を早く変えようとアルはフレイに質問を試みることにした。

「でもなんでそんなに有名なんですかあ」

あまり話題展開できてないな、とアルは気づいたが質問をした後だ

ったので遅かった。

「フレイレイはね、本当に強いんだよ。年齢は私達よりも上だけど未成年者に変わりないから、やっぱり侵入者ってあたしたち未成年者を狙うわけ。でもフレイの強さは折り紙付だから、全ての侵入者を無傷で倒してるって記録を保持してんからね」

フレイに話しかけたつもりが、レイラが答えてくれた。

しかし、そんなフレイの表情は至って普通でもある。

さらにはアイラも付け足すように話出す。

「今では外部の竜の一部で噂になってくれるくらいだからね。今では襲われることは無いって断言してもいいくらいだよ」

彼女ら二人は満面の笑みでそう話す。

内容は他者自慢。二人ともフレイを心底親しみ、尊敬しているかのように。

アルは嫉妬をしていないようだったが、普通の男なら少し嫉妬しそうなシチュエーションであった。

ここでフレイが落ち着いた口調で話した。

「アイラとレイラは少し大袈裟だったけど、まあそんな感じなのか。アルくん、これからもアイラを助けてやってね」

やはりフレイは暖かな笑顔を会話に添えていた。

それにつられたのか、アルも自然と笑顔になった。

アルが返事をしようと口を開いたその時であった。

ピー——！！！！

アルの言葉をもみ消すように、甲高く大きな音が鳴り響いた。

その音に大きな反応を見せたのはアルだけであった。

アルは耳を両手で塞いで若干蹲っているのに対し、他の三人は至って平然とした顔をしている。

「アル！？大丈夫？これはさっき言ったように“警察の笛の音”だよー！」

まだ音が絶えない。

当然アルにはアイラの声は届かなかった。

その音のせいか、アルには扉の向こうで隕石が落ちるような大きな音が鳴った事にも気付かなかった。

不思議と他の三人はその音には反応を見せた。

07 【警察の笛の音】

07 【警察の笛の音】

突如鳴った甲高い音にアルは耳を塞ぐ反応を見せたが、他の三人は何の反応も見せなかった。

さらには外でとてつもなく大きなものが天空から落っこちてきたような音が響き、一帯が揺れた。

これには他の三人は気づいたが、アルには甲高い音のおかげで聞こえなかった。

・・・やつと甲高い音が鳴り終わった。

ここでアイラがまた言う。

「これは“警察の笛の音”だって・・・！ね！」

アイラはアルの方を向いて話しかけたが、その後喋ったのはアルではなくレイラであった。

しかもレイラの表情はいつも見せる明るい顔ではなく真剣そのものであった。

「フレイ。“家の前にいる”のを見てきて。少し私はここで話すとするから」

「ああ」

フレイも同じ表情をしている。

この局面にてアイラはやつと気づいた。

アルはこの村にもともと住んでいた、という設定だったのだ。

この笛の音を知らぬはずがない。

だがアルは初めて聞いたような反応を見せてしまった。

——侵入者説：きつとそれであろう。

ゴクリと唾を飲み込んだアルもそのことに気付いたようだった。ほんの一瞬にしてアイラの家は緊張の空気が流れ、息をする音のみ耳に聞こえた。

アルの額から一筋の汗が流れ頬を通過したときにレイラの口は動き出した。

「アルくん？君は何でこの音を知らないんだね？はは・・・あははっ・・・」

そのセリフには微塵も今までのレイラを感じさせてくれない。二人称が普通だ…とかではなく、語尾に入った不自然な笑いがさらに恐怖を醸し出している。

セリフだけでない。大きく見開いた眼もおかしく、アルはその身を縮めた。

首が若干曲がっていて“異常者”の三文字がアルの脳裏を過ぎった。フレイがいたときに見せた真剣な表情がどれだけ緩やかだったのだろうかと振り返る。

「・・・べっ・・・別に・・・別に知らないわけじゃなくて・・・！ただ音が怖くて・・・！」

アルには上手い言い訳が思いつかなかった。

普段なら言い訳くらいなら口から発せられるだろうが、この場合は恐怖で何も喋ることができないどころか考えることさえもできない。

「ははっ・・・じゃあさっきのアイラの“これは笛の音だって”という説明は何を意味するの？ねえ・・・答えてよ・・・！」

もうダメだと悟ったアルは下を向くしかなかった。

下を向いたアルは、視界からレイラが消えたことにホっとしていた。しかし、体の震えは止まらない。

「レイラ！待って！違うの！」

「・・・何？」

アイラが必死にレイラを止めた。

「違うの・・・。以前アルはね、大きな音で辛い思いをしたことがあったんだって・・・。だから“警察の笛の音”でも何でも、ついその昔に聞いた音だと勘違いしちゃうんだって・・・。そういう意味で“これは警察の笛だよ”って確認させたの・・・！」

もちろんこれはデタラメである。

アルとアイラが同時に喋ると矛盾が生じそうだったので全てアイラに任せることにした。

「でも普通ならばいい加減に慣れるんじゃないの？それに疑問に思ってたんだよね、アルくんは未成年者なのに何で私たちが最初からアルくんの存在を知らなかったのかなって。おかしいよね？おかしいよね？何でなの？教えてよ」

アイラはその言葉に反応し真剣に何かを考えているような様子であったが、アルはレイラの疑問の意が分からなかった。

何故未成年の人をレイラたちは全員知っていけなければおかしいのだろう？

そういえばアイラがこの村にはほんの50人程しかいないと言っていた。

だが、少なくともアイラはこの村の広さ故に住民を熟知していないと言っていたはずだった。

その極わずかな50人程度の住民の中に未成年は一体何人いるのであろうか？

何故数えられるくらい的人数しか住んではならないのだろうか？

アルの思考回路は詰まりを見せた。

この村にある根本的謎が思考を止めているのだ。

「アル？少しアルの過去をレイラに言ってもいい？」

アイラの演技に合わせることにしたアルはコクンと頷いた。

「アルはね、“あの事件”以来、少しだけ外に出たのよ。親と一緒にね」

この瞬間、レイラの顔の表情が元通りになった気がした。

少なくとも恐怖は感じられないままではなったようだ。

「・・・まさか・・・！！危険じゃない・・・！絶対宝石を狙われるじゃない・・・！」

「ええ。でも苦肉の策で外に出たのよ。両親は宝石を持っていなかったしね。・・・数年間生き残り続けたわ。でもね、大きな音が鳴って・・・。その音の正体は隕石の落下。目の前にいるアルのお母さんを直撃したの。さらに数日後、それはアルのお父さんをも直撃した。・・・不運よね。そうしてアルはすぐさま“警察の笛の音”で守られるこの村に戻ってきたのよ。でもその笛の音の大きさはその隕石を連想させるものであった・・・。あまりにも衝撃的な過去だったから身体が拒否反応を見せてしまうのよ。そして村に戻ってきた頃にはアルは自立できる年だったから“カマトルさん”の下で過ごすことなく生きてきたの」

当然アルには“カマトルさん”が誰なのか知るはずもない。

アイラが話している間、アルは身体を縮めて小刻みに震わした。

演技の甲斐あってか、どうやら話しは二人の間で丸く収まったみたいだ。

レイラの表情から恐怖は消えたものの元通りにはならず、逆に落ち込みを見せるようになってしまった。

「・・・そうだったの・・・。アルんるん・・・ごめんね・・・」

「いや・・・最初アイラにも同じ感じで質問されたから・・・！ごめんねっ・・・」

「いえ・・・あたしこそ・・・。“この話”に敏感で・・・ごめんなさい」

よほど緊張したのか、アルは脱力感に襲われた。

“この話”に敏感なのはレイラもアイラも一緒である。

アイラもアルが宝石を付いていなかった時に見せた反応は、レイラほどではなかったが間違いなく同じものであった。

それから一切の会話がなされない部屋は静まり返っていた。

その時、扉を開くフレイが均衡を破った。

「やはり・・・侵入者の竜だ」

フレイが三人を手で呼び、言われるままについていくとそこには“群青色に輝く光沢の皮膚を持った竜”が倒れていた。

08 【群青色の侵入者】

08 【群青色の侵入者】

「侵入者の竜だ。」

全員が一斉に立ち上がり、フレイに付いていくように外に出た。赤やピンクなどと色とりどりの花でガーデニングされたアイラ家の外に出ると、青々と広がる大自然が目映った。

昼過ぎになり、快晴だった空は急変して雲が重々しく浮かんでいた。微小に感じる風が辺り一面を覆い尽くす雑草を揺らしている。歩くこと数分であつた。

そこにはぐつたりと倒れた竜がいて、その周りにある草木は潰され、地面には亀裂が走っていた。

その竜は“群青色に輝く光沢の皮膚を持った竜”であり、コイツは紛れもなくアイラを襲っていた竜である。

「さつきアイラを襲ったやつだ・・・」

アルの顔は一気に青ざめた。

「あれ？もしかして・・・この竜がそれなの・・・？」

「うん・・・そうだよ」

アイラの目は冷たさを帯びていた。

ほんの何時間前には大きな翼を羽ばたかせてアイラを襲っていたような竜が、今はぐつたりと地面にうつ伏せている。

群青色の竜の首元には宝石が見当たらなかった。

そう、彼は侵入者。

そして警察の笛の音を聞き、気絶し・・・倒れてしまったのだ。ただの笛の音だけで、ただ宝石を付けていないというだけで。

もしもアイラに会う前に笛の音が鳴ってしまっていたらと思うと、アルは背筋が凍る思いであった。しかしこの竜がアイラを襲った事には変わりなく、それは恨むべき犯行である。

だが、アルはほんの一欠けら程度の大きさの同情を抱いてしまった。

「おーい、君たちー！」

遠くの方で男の声が聞こえた。

「“ビツフィーさん”、久しぶりです・・・」

「ああ、悪い。記憶力がなくてね、君たちが誰なのか分からないよ、悪いね」

「いえ・・・」

ビツフィーという人も当然人竜なのであろう。

首元に宝石がついてある。

格好はどっからどうみても警察官。

帽子もかぶっていてそれらしい。

「もしかして、君たちの誰かがこの竜について知っているのかい？」

「ええ。私が知っているよ」

アイラは堂々と威厳を見せつけているような目でビツフィーを見て自ら拳手した。

「じゃあ私は署にコイツを持っていくから。後で署まで聴取させてくれ」

「いいわよ」

「では」

そういうとビツフィーはその竜の首元を掴んだ。

そして何やらポケットから出した“数珠のようなもの”を取り出し、

その竜の胸に押し当てた。

数珠のようなものは突如光り出し、全員目を瞑ってしまった。

光が消えて目を空けた瞬間、その竜は人に戻っていた。

その人竜は至って普通の人であるのが印象であり、年は25歳ほどの青年に見えた。

依然、その侵入者は生きているのを疑ってしまうように気絶したままである。

首元を掴んだまま、ビツフィーは己の姿を竜へと変化していた。

アルにはまだこの変化の様子が見慣れない。

関節が変わり、骨が突き出て、肌色も変わり、鱗ができ、しつぽが生え……。

みるみるうちにビツフィーは緑色の竜になっていた。

大きさは群青色の竜より一回りも二回りも大きい。

アイラは竜になっても元々小さいので比べていいのか分からないが、あえて比べるならば3、4倍ほどであろうか。

とにかく今まで見た中で一番大きい。

そしてビツフィーは「グルウ……」と発すると、侵入者の首元を掴んだまま、大空へと飛び立った。

「アイラぁ……。別に警察署に行かなくてもいいんじゃないのかなぁ……」

「ダメよ。こういうことは、こういうことなの。適当は許されないから。」

「う……。うん……。」

二人が話している間にフレイがレイラに問い掛けた。

「さっきのはどうだったんだい？」

「フレイ、なんかさっきのは誤解だったみたい。アールくんは正式に宝石を手に入れた子だよ。」

「そうか。ならよかった。」

その様子を横で聞いていたアルはとりあえずはほっとした。

それにしても、どうやらレイラはフレイの二人称を変えないようだ。二人が話している間にアルはアイラの肩をポンと叩き、小さな声で話しかけた。

「アイラ・・・後で・・・ちょっと話があるんだあ・・・。これからのことで・・・さあ・・・」

「そうね。やつぱりある程度話さないとまずそうね・・・。あの二人が帰ってから話しましょ・・・！」

「うん・・・！」

・・・その後の四人はさっきのことがなかったかのようにアイラの部屋で雑談をしたりお茶を飲んだりでまったりと時を過した。

アルの侵入者説も誤魔化すことができたらしく、レイラもフレイも疑うことが無かった。

雑談は盛り上がり、楽しい時間はすぐに去っていく。

そろそろ空が暗くなってきたところで、レイラが切り出した。

「んじゃ、そろそろあたしは帰るとするかねえ！」

「じゃあ俺も帰るとしよう。今日はごちそうさまでした。」

机の上にはお菓子の袋などが散らばっている。

それらのゴミをゴミ箱に捨てながらアイラは手を振った。

「いーえー！また来てね！」

「おじやましたあー！」

「ばいばい、アルくん。アイラをよろしくね。おじやました。」

パタン、と扉が閉まり、二人は帰っていった。

・・・

家は途端に静まり返った。

数分まで賑わっていた家の人口密度は減り、どこか家が広く見えて

しまう。

家に残った二人はこの時を待っていたかのように互いを向き合い、口を開こうとした。

「じゃあアイラぁ・・・」

「うん。話すね。この村で昔何があつたかを・・・！」

09 【語られる竜山の秘密】

09 【語られる竜山の秘密】

フレイモレイラも帰った。

今、アイラの家にはアルとアイラしかない。

「・・・話すね、この村で何があつたのかを・・・！」

「う・・・うん！」

「あ・・・でも簡潔にしか話せないから・・・私も詳しくは知らないから・・・」

「大丈夫だよ・・・」

アイラは一つ深呼吸をして目を開いた。

目線の先にはアルの目がある。

互いの目に互いの姿が映る。

「まず・・・昔、この村にいた王はね、とある約束事を定めたの。・
・ 詳しい数字は覚えてないけど、この村にはごじゅ・・・五十何
人しか住んではいけない、って住民に告げたのよ。」

何故？この二文字がアルの脳裏をよぎる。

広大で自然豊かで住むには申し分が無いようなこの土地で、五十程
の住民しか住んでいない理由は王が定めた約束事を忠実に従った結
果なのか。

となると、侵入者を許さない制度はこの約束事に従ったものなので
あろう。

分からないことだらけだが、アルは首を前に振って相槌した。

「なんでそんな約束を定めたのかは・・・知らないけど、そういうことがあったんだ・・・。でね、当然のように住民の竜たちは住居を死守するために紛争を始めたの。二つくらいのグループに分かれて戦いが始まったの。一つのグループは負けたわ。でも、それでも五十人には全然多すぎた。そして行われるは殺し合い。犠牲者は計り知れないほど・・・。むごかったそうね・・・。」

そついうとアイラは下を向いてしまった。

アルは「そんなことが・・・。」としか言うことができなかった。

・・・何故この村には五十人しか住んではならないのだろうか？

この疑問はアイラも知らないと言っているので保留かな...と諦めた。

「・・・そして、ついにその争いに終止符が打たれたの。その中で生き残れた未成年者はたった五人・・・。」

「ちよつと待つてえ！つ・・・てことはその紛争があつたのわ・・・。」

・・・しかも皆幼少期ほどだった。今でも未成年・・・。」

「ええ。十六年前。ちよつど私が生まれた年よ。」

アイラたち未成年者はこの紛争のことを憶えていないだろうが、今自分たちがこの村に住めているのは親のおかげだと知っている。恐らく、以前アイラが言っていたようにアイラの母はこの紛争にて息絶えてしまったようだ。

だからアイラは侵入者に対する恐怖を強く抱いているのだろつ。親が命を張って手に入れた住み心地の良い場所だから、絶対に侵入者に奪われまいとしているのである。

レイラがあのように豹変してアルを睨んだ理由も頷けた。

侵入者が宝石を手に入れたということは、あの辛い紛争で生き残った人竜の宝石を奪った……ということ。それを許さないのは当然であろう。

「……アイラは生き残れたんだあ……。そのお……。紛争に……」

「親が守ってくれたわ。レイラやフレイ君も同様に……。そうして私たちは“カマトルさん”という恩師に育ててもらったの。だから生きてこれたの。侵入者から守ってくれてね。」

カマトルという人が、ともに歩くこともできない幼い頃のアイラ達を支えてくれていたそうだ。

そうなる と確かにアルはどうやって生きてきたのか？という疑問は当然ながら出てくる。

アイラの咄嗟の嘘は完璧だった。

上手にレイラを誤魔化すことができたから良かったものの、何故アイラは最初にこのことを教えてくれなかったのだろうか？とアルは疑問に思った。

だが少し考えれば、辛い過去を話したくない、思い出したくない……からだ と理解できた。

「ごめんね……。辛い過去を話させちゃってえ……」

「大丈夫よ。アルはこれから私を守ってくれるんだもんね！」

アイラは幸せそうに微笑んだ。

その笑顔がアルにとって何よりも嬉しかった。

「そして、王は科学技術を駆使して作り上げた“警察の笛”と“特殊チップ内蔵の宝石”でこの村の出入りを厳重にした。その宝石を、

村に残れた五十数人の人々に渡したの。まあ、そういうことがあったわけで……。だから、これからはアルはさつき私がレイラに言ったような過去を持つ、という設定でお願いね」

「うん……」

「でね……今度、未成年の生き残りのもう二人を紹介するね。カマトルさんとも、いずれ会えるよ。」

「分かった……。ありがとう……。！」

——アルは警察の笛の音にこれから慣れなければならない。

これから会う人会う人に疑われるのはごめんだった。

疑われているうちに、アルが侵入してきた“人間”だということがバレるのも時間の問題である。

もしも人竜ではないと知られたならば、侵入者かつ弱い人間と世間に知れ渡ることになる。

この宝石を狙う竜も現われるであろう。

アイラがせっかくくれたこの宝石を大切にしなければならい……。

アルは自分の首元についた宝石をぎゅっと握りしめた。

「じゃあ……警察署行きましょ！」

「ああ……。うんっ！」

10 【警察署での悲劇】

10 【警察署での悲劇】

この村の過去をアルは知った。

人竜たちが侵入者を恐れ、嫌う理由も分かった。

彼ら人竜は手に入れた自分の住居を死守しなくてはいけないのだ。

親が命を張って手に入れた住居に住む子もいれば、数々の犠牲を失って今ここに生きている人もいるのである。

先程鳴った警察の笛の音によって倒れた侵入者、“群青色の竜”についてアイラは警察署に向かうらしい。

この竜は宝石を奪うべくアイラを襲った犯罪者である。

「じゃあ・・・警察署に行きましょう！」

「ああ・・・うんっ！」

どうやらアルが同行する理由は、侵入者からアイラを守るためである。

早速任務開始、といった感じでアルは意気込んだ。

すっかり夜となり、少し肌寒く感じた。

雲はまだ空を漂っており、眩しいくらいに輝く月を半分ほど隠していた。

星も雲と雲の隙間に散在し、アルの目は空に釘付けとなった。

「今日は雲があって星があまり見えないね。」

そうアイラはため息を吐いていたが、アルの目は上を向くことを辞めなかった。

ゆっくり歩くと、他の家とは比べ物にならないくらい大きい建設物

が建っていた。

形は真四角で色気がない。

窓がぼつぼつとあるが一つも開いていない。

アイラの家やこの村とは対照的に、この建設物の敷地には草木が見当たらない。

目に留まるのは、恐らくその建物の入口であろう扉の隣にある広大な荒野である。

その荒野は鉄の柵で囲まれており、鉄の策の頂点は槍のように鋭く尖っていた。

「ここが警察署よ」

アイラはそういつと扉に向かって真つすぐと歩いていった。後ろについていくようにしてアルも歩いた。

扉はガラスでできていて、近くに寄ると中の様子が見えた。

鍵が掛かっていない扉を開くと、ひろがるのは殺風景な一室であった。

その一室には先程会ったばかりのビツフィーが冷たそうなイスに座っていた。

「先程のアイラです」

「悪い、記憶力に欠けるもので・・・」

「群青色をした侵入者について話をしに来ました」

アイラがそういつと、ビツフィーは手元にあつた書類の一番最初のページを見てやつと頷いた。

「ああ、さっき侵入者なんていたな。そうだ。話を聞かせてくれ」
「ええ」

ビツフィーは部屋の奥にある扉の前に来ると、アルたちを招くような手振りを見せた。

その通りにアルたちは着いて扉を開くと、目の前には大きな鉄の檻

が置いてあった。

檻の中には未だにぐったりと倒れている青年であった。

彼は群青色の竜になる青年、つまり侵入者だ。

「今から彼を起こすでしょう」

そう言っているとビッフィーは鍵を開けて檻の中に入り、青年の前に立ち寄った。

ガッツ・・・ガッツ・・・ガッツ・・・

ビッフィーは青年の顔面を思うままに殴りつけた。

手加減など微塵も感じさせない腕の振り方にアルは絶句した。
見る見るうちに青年の顔は赤く腫れていき、血も流れ始めた。
アルはその光景を観るに堪え無くなったのでふと横を見ると、同様の色を見せないアイラの顔が目映った。

青年への“暴行”は数分間続き、ようやく青年は目を覚ました。

激しい痛さ故に声もまともに出せない様子であった。

「うう、うう・・・」としか発することはできずに悶え苦しむ様に、やはりアルは目を背けた。

「ええ・・・と・・・その女の子よ。この青年は一体何があったんだ？」

ビッフィーは青年の髪の毛を掴み、持ち上げながらアイラに聞いた。
「私を襲ったわ。狙いは間違いなくこの宝石よ。ずっとずっと私を追いつけたの」

「そうか。罪は確定だな」

ビッフィーは青年を掴んだまま鉄の檻から出てきた。

そして今までの道に戻るように足を進め、署の外にまで出ていった。
当然アルとアイラもついていった。

アルは足が重くのを感じ、ついアイラの肩を借りてしまった。
アイラは何も言わずにアルの歩調に合わせていた。

外に出るとビッフィーは鉄の柵に囲まれた荒野の中に入っていた。
どうやら荒野は立入禁止のようでアイラは足を止めた。

そしてビッフィーは荒野の真ん中にある鉄の棒などを立て、黙々と
なにかの準備をしていた。

青年は顔を殴られ続けたのが効いているらしく、反抗をしようと
しなかった。

そうして——気付けば死刑台と思われる十字架と槍が立てられて
いた。

そこに括り付けられようとする青年。

だがその時だった。

「殺されてたまるか・・・！」

青年はそう叫ぶと竜の姿に変化した。

「シユアアッアアッア！」

闇夜で色がはつきりと見えないが、間違いなく群青色の竜なのであ
ろう。

群青色の竜はその鋭い爪でビッフィーを切り裂き、ビッフィーの肩
からは血が飛び散った。

アイラに軽く寄りかかっていたアルは体勢を整えると、ビッフィー
の名を叫んだ。

だがビッフィーもすぐさま竜の姿に身を変えた。

やはり体の違いが違った。

ビッフィーはしっぽを振り、青年の体を吹っ飛ばした。

アルはこの広い荒野の理由がなんとなくわかった気がした。

この場で死に際の死刑囚の悪あがきを止めるべく、戦闘場が用意さ
れているのだろう。

ビッフィーは爪で群青色の竜の腕を勢いよく切り裂き、彼の体と腕

は分かれた。

群青色の竜は体を人間の体に戻し、あまりの激痛にその場でゴロゴロと転がり続けた。

「終わりだ」

そう言うとビツフィーは彼の身体を十字架に縛りつけた。そして、青年の体をさらに切りつけていった。

「侵入者め。お前は犯罪を犯した！苦しむがよい！」

ザグツ・・・ギツ・・・キツ・・・シャシャツ・・・グジャツ・・・

——青年が縛り付けられてから、アルは目を開けることができなかった。

音で判断できたが、今の青年の身体は原型をとどめていないだろう。人が人を切りつける音は闇夜に響き続け、それは途端に止まった。そしてその後、何かが燃える音も聞こえた。

「アル、もう終わったから安心して」

「・・・でも・・・でもお・・・」

後片付けも終わったのか、ビツフィーは人間の体に戻るとアルの前に立った。

「これからも宝石を大切にするようにな。では失礼する」

何事もなかったかのようにビツフィーは警察署に戻っていった。

「アイラぁ・・・何もここまでしなくても・・・いいんじゃないのかなぁ・・・」

「ダメよ、仕方ないの。犯罪は止めなくてはいけないの。・・・アルは初めてだからちよつと怖かったかもしれないけど、いずれ慣れてくるわ。何度も侵入者から襲われると次第に分かってくるから・・・」

「うん・・・」

何故ここまで侵入者を酷く殺さなくてはいけないのであろうか？
侵入者に人権はないのだろうか？
アルは宝石をギュツと握りしめた。

・・・宝石を握りしめた瞬間、ある一つの疑問がアルの頭に浮かんだ。

だが、目の前で起きた悲惨な出来事が頭から離れなかったために、アルはこの極めて重要な疑問が浮かんだことも忘れてしまった。
アルはアイラの肩を再び借り、ゆっくりと家に向かって歩き出した。

——ストーリーはまだ始まったばかりである。

11 【十六年前の紛争】（前書き）

投稿が遅れてすみませんでした。執筆開始です。

11 【十六年前の紛争】

11 【十六年前の紛争】

……十六年前……

自然に恵まれた村では紛争が勃発していた。
住民は緑を大切にしているらしく、決して戦いの手段に火を使おう
とはしていない。

炎の赤色の代わりに、血の赤色が緑色を覆い尽くした。

「シユアアアツ！グルルルツ……！」

広大なこの土地で暴れるのは竜である。

巨大な竜たちが傲慢の爪や尻尾を振りかざし、激しい乱闘を繰り返している。

竜たちにとって生か死のこの戦いは寝る事さえも惜しまれ、毎日の戦いで身を滅ぼしながら精一杯生きている様子であった。

既に緑あふれる地面の上に倒れている竜も何匹が見え、その光景はまさにこの紛争の過酷さを如実に表していた。

……村のはずれに、一際大きな木が一本立っている。

その木はこの村の火山のように象徴的存在ではないものの、高く広く伸びる葉や枝はなんとも雄大で存在感は確かにあった。

その木を守っているかのように動こうとしない巨大な竜が一匹いた。

「ウオオオー！」

突如十数匹にもなる竜が群れをなして木にいる竜の前まで来ようと、羽を羽ばたかせている姿が見えた。

だが木の前にいるその竜は動揺の素振りを見せず、竜たちに向かって羽を扇いでみせた。

すると風が凶器へと変わり、竜たちの翼に傷をつけ、一瞬にして十数匹の竜たちが一斉に地面へと落ちていった。

倒れた場所は五十メートルほど先。十数匹の竜たちは木の近くに寄る事さえできなかったのだ。

圧倒的強さを見せつけたその竜は一本の木の枝の中を覗いた。

——その木の枝の奥には、一人の赤ん坊が眠っていた。人竜の姿なので体は小さく、

見た目からして柔らかそうな肌は潤っていた。

このような赤ん坊が将来、轟々とした竜になることは到底考え付かない。

「ガルウ・・・シウルウル・・・」

竜は暖かさを帯びた目で赤ん坊を見つめ、その大きな手で頭をなでた。

ふと、その竜の背後から葉が不自然に動く音が聞こえてきた。

その竜が即座に後ろを振り返り、人影を探したほんの小さな瞬間だった。

「シャシャシャッ！ガウッ！」

小型の一匹の竜が赤ん坊を抱えた。

息を潜めタイミングを見計らっていたらしい。

一瞬にしてその竜の顔は青ざめた。

「・・・ふっ、取引だ。お前はこれからこの紛争が終わるまで俺を助ける。さもないと、この赤ん坊の命はない」

互いに体を竜から人間の姿に戻した。

どうやら竜の間では、話す時は人型になるのが通常らしい。

赤ん坊の親らしき人竜は、間髪入れずに答えた。

「ええ、分かったわ」

「ほわぁ...おはよぉ...」

「おはよう！アル！体休められたかな？」

天気は快晴。空は雲が若干残っているものの、どんよりした雲はなく、日差しは元氣よく村に降り注いだ。

一夜明けると昨日起きた恐ろしい出来事も次第に記憶が薄れていき、アルは元氣を取り戻していた。

警察署に行った後、二人はアイラの家に戻って眠りについたのである。

アイラはアルにベッドを譲ろうとしたが、アルは床で寝ることを選んだ。

二人とも寝相が良いらしく、寝た場所と同じ位置で朝を迎えていた。

「あ、そうそう、アルうゝ？」
「ふにゃ…？」

寝ぼけて言葉もままならないアルとは対象的にアイラはエプロンをつけて朝食の支度を順調に進めていた。
まな板と包丁の音がなんとも朝らしい。

「今日もお客さんと呼んでるから」

「え？お、おおっ！？」

「リオンちゃんって言うの。もしかしたらアルの苦手なタイプかもね、ふふふっ」

アイラは背中越しに笑ってみせた。

流石にアルも目覚めたらしく、”リオン”という人のことを気になり始めていた。

でもやはり楽しみなことに変わりはない。

この村でたくさんの仲間ができそうなのだ。

それも、ほのぼのとした仲間。

アルの村では、戦と死を共有する者、が仲間だと呼ばれていた。

生まれた時からそう学ばされ続けていたが、アルは本能なのかなんのか分からないが性格的に”平穩”を無意識に求めていたらしい。

「リオンって子、一体どんな子なのお？」

「会ったらすぐ分かる…って感じかな。以上！」

「以上って…」

「はい、召し上がれ」

アイラは新鮮そうな野菜サラダとベーコンを挟んだ目玉焼きを皿に乗せてアルの前に置いた。

あと大盛りによそられたご飯もだ。

「おお美味しそうだぞおっ！」

「美味しいんだぞっ！」

アイラは自分の分の朝食を持ってきて、アルの前に座った。
「いただきますうっ！」

…朝食を食べ終わった二人は食器を洗っていた。

アルの顔が満面の笑みだったので、ご飯はよほど美味しかったのだろう。

二人で洗いものをしたためすぐに終わったらしく、すでに花の水やりをしていた。

「こんちわー！はやくっー！はやくきてー」

ドアの向こうで女性と思われる声が聞こえてきた。

アイラは返事をする、持っていたジョウロをアルに渡してドアの方へ走っていった。

ドアを開けると一人の女が立っていた。年齢はアイラより少し年上くらいである。

そう、彼女もまた——子どもなのだ。

ドアが開くとすぐさま彼女はアイラの方に走り、そして抱き付いた。
「アイラちゃん久しぶりー！ あ、お茶頂戴、いつもので。熱すぎるのダメなのは分かってるよね…！」

それはどこか媚びているようで甘えているようでもあった。

声は甘い声、という表現以外に見当たらない。

男を口説く玉の興狙いの悪女のようにアイラに体をくっつかせていた。

厚い抱擁が何十秒たっても終わらないのでアルの目は次第に点になっってしまった。

「もぉっ・・・いつになつても“抱きつき癖”は治んないのねっ。今日は新しい人が見えてるんだから。奥にいるのはアルっていったね、私を助けてくれた恩人なのですよっ」

アルは深くお辞儀をしておいた。

さっきの抱きつきが本当に“癖”なのか、“愛”なのかは分からなかったが、こういう人もいるんだなと割り切ったアルはお辞儀した後アルは花の水やりを再開させた。

「アイラちゃんてばいつも助けてもらってばかりじゃん。アルくん？ ま、よろしく」

リオンは抱き付いていない時は透き通ったような声をしている。

アルは一瞬でリオンのことがなんとなく分かってきたようだった。切りが悪いらしく、アルは背を向けたまま再度会釈した。

「リオンちゃんのばっか。私だっていつか強くなるんだから」

アイラは反抗してみたがリオンに軽く無視をされてしまい、話は途切れた。

彼女の名前はリオン。

服装は派手の一言に尽きる。

男を挑発しているような服の上半身は露出度が高く、身軽な感じで薄い生地のスリーブだ。

ジーンズの短パンのすぐ下の長さまである黒い靴下に、茶色のブーツを履いている。

そして最も印象的なのが純白のカチューシャだった。

それは彼女のショートヘアに良く似合っていた。

「アイラちゃんも竜になった時に意識はつきりさせなくちゃならないからね。人に頼ってばっかはダメみたいじゃね？」

「だから――」

アルは少しだけ首を横にかしげたあと思い切って質問することにした。

「アイラあ…？ この前竜になってくれた時は意識ちゃんとあったよねえ…」

「ええ、でもみんなのように優雅に飛ぶことができないのよね、飛んだ瞬間疲れて意識がなくなっちゃうんだ…」
アイラは言い辛そうに下を向いて喋った。

「竜になると便利だね。早いし、力もつくし。な、アル君！」
「お、おお！…え！？」

リオンはアルにも抱き付いた。やはり癖なのだろう。
アルはこのような体験が過去に一度もなかったのだとおどおどした。

「そうだ…み…見せてよ…アル君の竜をさ…」
「………」

12 【五人目】

【五人目】

「そうだ・・・見せてよ・・・アル君の竜をさ・・・」
「・・・」

アルは焦点を無くしたような目となった。

不幸中の幸いと言うべきか、リオンがアルに抱きついているため彼女からはアルの汗いっぱい顔は死角となっている。

リオンの後ろでアイラが必死に腕を使って罰の字を作って、「言っちゃダメ」とサインを出している。

最初その腕の形が十の字に見えたので、アルの頭は更に真っ白になり困惑したように首を捻り続けていた。

アイラは腕の組み方の間違いに気付き、慌てふためいた後ようやく×の字の形に直した。

絶えずリオンの腕はアルに密着したままなので、アルが首を動かす様子もリオンには見えない。

「なんで教えてくれないの・・・？」

「いや・・・別に・・・ほらぁ・・・。秘密主義者なんだ、僕・・・」

見苦しい言い訳だったが今のアルにはこの一言が精一杯のようだった。

アイラも首を横に振りながら腕を上にはじめたり横に振ったりして取り乱している。

アルはアイラを見ずにリオンの返事を待つことに決めた。

「へえ・・・そうなんだ。いるもんなんだね、珍しい人つて。私だったらいつでも見せるつてのに。竜って格好良いじゃん？ 見せるのが普通でしょ」

リオンはしらけた顔をしてアルの体から離れた。

アルもアイラも安堵のため息を一齐に吐き、崩れるように腰をおろした。

「“マルシア”ならいつでもどこでも竜になるつてのにね」

「え？ “マルシア”？」

アルは初めて聞く名前に首をかしげた。

でも何故かアルはその“マルシア”という人物が想像できた。きっとこの人も、竜の子供なのだ。

そしてこれで、竜の未成年者の生き残りの全員となるのだ・・・と。

「アルー？ マルシアはね、私たちと同じ未成年なんだよ！」

案の定。アルの表情に笑みが浮かんだ。

アイラ、レイラ、フレイ、リオン、マルシア。

これで未成年者が 五人目 となる。

アルと同世代の《仲間》に全員と会うことになるのだ。

「たぶん今頃、マルシアは“カマトル”さんのところにいるのかな
」

“カマトル”という名前は聞いたことがあった。

紛争に生き残った幼き五人をたった一人で育てたという、恩師。

「アルくんもいることだし、行くことにする？ いや、行こう！」

「そうだね、この山の案内も含めて！」

「・・・うんッ・・・！ありがとお・・・！楽しみだぁ・・・！」

外に出ると、やはり豊かな自然が広がっていた。

名所や絶景を幾つもアイラとリオンに教えてもらったが、どれも絶景に見えるからアルは興奮したままだった。

そして着いたところは、大きな湖であった。

湖は円の形をしていて、円の中心を通る一本の路があった。

その道をアイラとアルは歩き、リオンは面倒くさいからと竜になって飛んでいった。

道の行き止まりは円の中心部。

そこには一軒の建設物。

家というよりは施設のようである。

「やっと着いた」

リオンはまだ歩いているアルとアイラを差し置いてドアをノックした。

反応は無し。

もう一度ノックをする。

またもや反応無し。

「あれ？おかしいな。今日はマルシアがカマトルさんのところに行くって言っていたのになぁ」

「いつ聞いたの？それ」

「アイラちゃんの家に行く途中でマルシアに会ったのよ、『今日は

手伝うんだー』って張り切ってた」

「どうするのお・・・？」

「アル君、じゃあ中に入ってきてよ」

「ええ・・・！？どうやって・・・？」

「見てよ。定番じゃない。ノックしても反応が無い家といったらさ」

リオンはアルの背中を押した。

恐る恐るアルの手がドアノブに近付き、そして握った。

キユウツ・・・

「鍵が閉まってないッ・・・！」

「私の記憶だと、カマトルさんはいつもこう言ってたわ。【絶対に鍵と心の扉は閉めなさい】って」

「じゃあ・・・おかしいじゃない・・・」

「は・・・入るのお・・・？」

アルの震えた声が、この空気に緊張感を与えたように思えた。

しかしリオンの声は明るく、興奮に満ちていた。そして・・・

「入るしかないじゃない」

「そうだね！うんっ！」

アイラも軽い気持ちで同意したようだった。

不法侵入だけど入るしかないな、とアルも渋々諦めた。

「じゃあアル君から入ってよ」

「ええっ！？」

キイ・・・

アルを先頭に3人は顔を覗かせた。

13 【ADVENTURE!! ～始まり～】

13 【ADVENTURE!! ～始まり～】

最初は山の案内と仲間紹介をするだけだった。

アルにとって最後に出会う、未成年者の“マルシア”、幼い彼らをたった一人で養ってきた恩師“カマトルさん”この二人と顔を合わせるために、二人がいるという巨大な湖の中心にポツンと立っている建設物にまでやってきたアルとアイラとリオン。

呼鈴を鳴らしてドアをノックしてみた・・・が、応答はなかった。

軽い気持ちでリオンとアイラは家に入ろうとし、何故かアルが先頭立ってドアノブを持ち、家の中に入ることを決めた。

キィ・・・

ドアが開き、狭い隙間には3人の顔が縦に並んだ。

恐る恐る開けた家の中の照明は全て落ちていて、アルの恐怖心をあおりたてた。

つい十秒前までは余裕こいていた二人もどうやら固唾を呑んだようだった。

しかし、どうも様子がおかしい。アルよりも恐怖心を露にしている。

「私の記憶によると、いつも電気が付いていてね。玄関先のドアの向こう側にあるリビングにいつもカマトルさんはいるはず。最初からうすうす変だと思ってたんだけどね……。呼び鈴で出なかったのは初めてだったから。冗談だろうかとは思ってたけど、電気がついていないのは不安かな……」

最初からアルもそんなことを考えてた。

だが、敢えてそこは突っ込まずにアルはリオンらに問いかけた。

「じゃあ、早く行こうよ……。カマトルさんって人が危ないかもしれないしい……。うん……」

「そうだね……。行った方がいいんじゃないのかな……。リオンちゃん……。！」

「行くしかないなっ！……。まずはアル君から行って……」

そついつてリオンはアルの腕にしがみついた。

アルは細めた眼でリオンを見てやったが、リオンはニヤリと笑い、指で前を指してアルを急かした。

目線を前に向け、何も言うことなくアルはドアを完全に開き、一歩リビングに近づいていく。

アルのそれほど小さくもない手がリビングのドアノブの上に乗った。

ドアは木できていて、ガラス張りの部分もあり、そこはモザイクのように曇っている。そういう構造なのだろう。その構造から、部屋に光があるかないかが伺える。

そういった部屋に入るのは何とも無気味であったが、アルはそのドアノブを回して引いた。

再び、キィ・・・という高い音が鳴った。

「カマトルさんッ！マルシアッ！」

全員が驚愕の表情を浮かべ、リオンがそこにいる彼ら二人の名前を叫んだ。

暗くてよく見えないが、床にはゴロツと二人の人が倒れ込んでいる。アイラは灯りをつけようと部屋の壁を手探りで探し、リオンは下でまんまるとうずくまる二人に寄り添って肩を揺らした。

「アイラちゃんっ！何してるのっ？電気はカレンダーの下にあるんだよっ！」

「え・・・うん・・・」

パッ・・・

電気が付き、視界は開けた。

同時にアルはその場で立ちすくんでしまった。

床に転がっている二人の口にはガムテープが付けられ、体中ロープで縛られている。

そしてアルは自分が履いている靴の下には絨毯が敷かれていたが、それは黒みがかかった赤でどろどろしていた。

彼ら二人は重傷であった。

体から外されて床に落ちているロープも、リオンによって破られた衣服も赤で染まっている。

「アイラちゃん？そのテレビの横にある棚の二段目に救急箱があるから早くっ！」

そう強く言ってみたくせに、リオンは応急処置をアイラとアルに頼んだ。どうやら不器用らしい。

アルは応急処置をしながらも、カッターナイフで強引に切られた口ープの跡が目映ってしまい、なんとなく気になった。

しかし処置を優先しなくては、と自分の無駄な思考回路にムチを打って、カマトルさんだかマルシアか分からないまま手当てに専念した。

「心臓はちゃんと動いてるみたいだよぉ・・・！」

アルが安心した声で二人に伝えた。

しかしアイラはまだ慌ただしい。

「マルシア君の方は・・・心臓の音がなんだかおかしい・・・。生気を感じられない・・・」

「アイラちゃん・・・お願いっ！」

「頑張るけど・・・マルシア！マルシア！」

アイラの目は次第に湿っていった。

声も掠れてきた。

そんな時、アルが治療していたカマトルの意識が戻った。

「君は・・・くっ・・・だ・・・誰なんだ・・・？」

カマトルは口を開いた途端苦しみ出した。そして第一声が「誰だ」だった。

アルはこの時、確信聞けないまま息絶えてしまうのではないかと不安になった。

そしてそんな自分を悔やんだ。

「今消毒しますね！僕はアイラの友達のアルです。この宝石が証拠です」

「そうか・・・ありがとう・・・。それより大変だっ・・・！“火山玉”が侵入者と思われる人竜に盗まれた・・・」

「えっ！？」

大声あげて驚いたのはアイラとリオンだった。

「・・・“二つとも”ですか！？」

アイラはマルシアの手当てを止めてまでカマトルの話を聞こうとしていた。

当然、アイラは一瞬間を空けたものの、すぐさまマルシアの処置を再開させた。

「・・・一つはここにある。いつもの場所だ・・・」

カマトルはそう言う指で部屋の隅の方を指した。

腕を上げたのが痛んだのか、喘ぎ声を漏らした。

リオンは立ち上がってすぐに隅にある金庫へと向かった。

「番号が書いている場所は・・・」

「大丈夫です、覚えていますから」

リオンは不器用ながらも確実に暗証番号を打った。

打ち始めてから30秒ほどで金庫が開いた。

「“玉”が一つしかない・・・。やばい・・・」

リオンの顔は青ざめた。アイラの顔も青ざめているのもアルには分かった。

そんなアルは首を傾げないようにと必至に専念した。

「リオン・・・その“火山玉”を持て。今お前らが来てくれて助かった。そしてまず村を出て、“火山玉”を取返してくれ・・・」
「・・・はい・・・」

どこか不本意そうであつたが、リオンとアイラたちに他の返答は許されなかつた。

「フレイとレイラも連れて行け・・・僕はもう動ける・・・マルシアは任せなさい・・・」

よたよたと立ち上がったカマトルは、今にでも倒れそうだった。アルたちは心配の目を向けたが、カマトルに急かされて家を出ることにした。

リオンはしばらくカマトルから、“火山玉”を盗んだ犯人の特徴を詳しく聴かされた。

そして、リオンの手に“火山玉”が抱えられた。

「私は首元に“玉”を付けてるね。今からフレイを呼んでくるから。あなたたちはレイラを呼んでっ」

「うん...!」

リオンは竜の格好になった。

人竜が竜になる時は多少の時間がかかるみたいで、あたかも「はい、今、カッコいい竜になりましたよ」と主張しているようにも見えるが、アルはそうは思わなかつた。

むしろ、もう何度も竜を見ているはずなのに、まだ竜そのものに感動している。

リオンは大きく羽ばたいて見えなくなつていった。

「背中乗って！レイラの家を教えて！」

アルはアイラを背負うと、一気に湖の中心を通る道を走り抜けた。

「ねえアイラ？ “火山玉” ってなんのことだろう？」

「・・・ふうっ・・・」

向い風がアイラの口を開かせなかったようで、アイラは思わず目も閉じた。

そしてアルのジャケットを強く握り締めた。

「ふぁふぁふぁ・・・」

「《あとで》ね。分かったぁ・・・！」

今から山が出る。

アルのワクワクは止まらないようだ。

・・・そして惨劇が近付き始めている。

14 【ADVENTURE!! ～旅の前に～】

14 【ADVENTURE!! ～旅の前に～】

「アイラぁ・・・“火山玉”ってなんなのぉ・・・？」

足を遅めてアルが背中にぴっちりつくついているアイラに動揺することなく問い掛けた。

なかなか返事がないので後ろを振り向くとアイラは目に涙を溜めていた。

「速い・・・速いよ・・・」

アルが走ったスピードはアイラの体に負担がかかったのだろう。

アルは、アイラが竜を上手くコントロールできない理由がなんとなく分かった。

「早く聞かないと矛盾が出たりして、またレイラたちに疑われちゃうよ・・・」

「速い・・・」

「アイラぁ・・・」

「わっ・・・あわわわわ!・・・今!・・・今我に返ったからっ!」

そんな常用語がどこにあるか、と口から出そうになったが、ここにあるので突っ込まないで正解だと思った。

流石に足の速さを遅める。

「・・・“火山玉”っていうのはね」

そう言つてアイラは、この村無くてはならないと断言してもよいだろう山を指差した。

「ううん・・・、なんてのかな。この山って普段は噴火してないでしょ?」

「普段とは？え、噴火すんのッ？」

「うん、それでね、実はこの火山は噴火する活火山なのよ。しかも、本来なら常に噴火して村に大被害を与えるの」

「常に？今は大人しいじゃん」

「そう。その噴火を止めているのが“二つの火山玉”」

アイラはアルの顔の前で空気に二つの丸形を描いて説明した。その丸はちよつぴり歪んでいたが。

「この二つの玉が近付いてさえいれば、火山の噴火は抑えられるのよ」

「不思議なんだねえ・・・それ・・・」

「原理は私にも分からないかな？。でも今盗まれちゃったでしょう・・・一つだけけど・・・」

「つてことはもうじきこの山が噴火しちゃうのおっ!？」

「ええ・・・。この世の終わりよ。16年前の紛争が意味を成さなくなる」

アルは広漠とした村を360度見てみたが、見渡す先には必ず険しい山があつた。

もしも山が噴火したらどうなるだろうか。しかしアルは何の動揺もしなかつた。

こんなことを考えるのは不謹慎かもしれない。

だが“冒険”が近づいていることに好奇心が湧いていた。

それは玉を取り戻せることを前提として。

山を出たことのない子供が（自分と年齢はほとんど同じだが）一国の平和のために故郷を離れ、侵入者に奪われた“平和”を奪い返す、というシチュエーションに満足しているのだ。

”奪い返しに行く”、ではなく。

「あ、そうそう。なんで相手は二つとも盗まなかつたんだろう？」

単純な疑念がアルの頭に突如現れた。

しかしその疑いはアイラと共に謎のままとなってしまった。

「・・・そうそう、玉を盗んだということは侵入者が私たち“勝ち組の人竜”を滅ぼすつもりかもしれないのよね」

アルは適当な相槌を打つ。

「噴火を起こして、きっと私たちに復讐するのよ。私のような子供は、あの紛争には関係がないっていうのにね・・・」

「確かに噴火したら大変だなあ・・・即刻奪い返さなくちゃねえ・・・」

「恐らくその犯人は私たちと会った瞬間、すぐさま逃げるでしょうね。竜の姿になって。でもそういう時こそ、アルの速さが必要なのよ」

「・・・僕のお・・・？」

「ええ。人竜が竜になる時って時間がかかるじゃない？それに、竜になった後すぐに高速で飛べるわけじゃない。だから俊敏性のある、アルの足が必要なのよ！頑張って、あなたしかできないんだから！」

夏場一つ顔を飛び出しているひまわりのような明るい表情でアイラは微笑んだ。

アルはコクンと頷いて、速度が遅い事に気付きその足を早めた。

アイラの視界にレイラの家が映った。

ぴつちりと背中にくっついていてアイラはアルの肩を叩くと、そっちの方を指さした。

アルはアイラを下ろすと、アイラの手を握って走りはじめた。

すぐにアイラはレイラの家をノックして大声でその名前を呼んだ。

返事も無くドアはすぐに開いた。

「おおー！ “アルっち”と“ライア”ではないかつ」

「そろそろそれやめようよ、レイラちゃん。もうネタが無いでしょ」

「いいのいいの。んで、二人してどうしたんだい。その繋がれた手は何を意味しているのかなあ？ ひっひっひっ！」

わざと間を空けた。しばらくして、

「大変なんだあ・・・！ よっ！？ ふわ・・・！ カマトルさんのところにいったらさ、玉がないというか火山がどつかあーんって！」

「私が説明するわ」

アイラの説明はおおよそ15秒程で終止符を打った。

その間アルは説明したかったのか、どこかの保育園で扱われているダンスのように手やら足やらじたばたと動かしていた。

気付けばアル以外の二人の方が真剣な目つきになっている。

自嘲した表情を浮かべた後、真剣な目つきにしたアルは切り出した。

「よし、山を出よう」

15 【ADVENTURE!! ～出発～】

15 【ADVENTURE!! ～出発～】

「その侵入者がどこに行つたのか分かるの・・・？」

火山の噴火を食い止めていた玉の一つを侵入者に奪われた。

それを奪還するため、アイラやその他の人竜の子は生まれてからずっと居続けていた地元の村から出ようとするのであった。

既にアイラ、アル、レイラの3人は家を出て、山の入口に向かっていた。

走りながらアルは二人に疑問を投げ掛けてみた。

「ええ。火山玉は二つで一つ！離れていてもちゃんと呼び合っているの」

「じゃあなんで二つとも盗んでいかなかったんだらうねえ・・・」

この質問はレイラの家に着く前にアイラに問いかけたものと同じだ。レイラに聞いたら答えが返ってくるのではないかと期待したのだ。

アイラの立場からしたら鬱陶しい他ならないが。

レイラも口が止まった。そうだそうだ、玉を二つ持っていけばいい話ではないか。

「・・・」

あの紛争で生き残り山に住まうことを認められた人竜を恨んでいて、彼らを皆殺しにするために火山を噴火させようと外部者が火山玉を盗んだのかと思っていたが、そう考えるとやはりおかしい。

玉を引き離すことが目的なら、まず二つ奪っておいてその後ゆつく

り引き離せばよい。

一つを置いて行ったら追いかけられるに決まっている。現にアルたちが追いかけているのだし。

アルはそう考えてみたが、アイラたちの見解は想像以上に楽観的だった。

「玉が二つあると重いから、一つ置いていったのよ。カマトルさんが一つ守ったのよ。きつとね」

「じゃあなんで金庫に鍵が掛かっていたのお？片方はあ．．．さあ．．．」

「．．．．．ふいに閉まっちゃったとかじゃないかね、アルくんよ」

呼び名が普通になっていた。遂にネタが切れたのだろう。

もつと捻れば面白いあだ名ができたろうに、とアルは頭の中で自分のあだ名を考えてみたが納得のいくものは一つも思いつかなかった。アルはアイラたちを見習った。今考えるべきことは、奪われた火山玉を奪い返すこと。

「レイラ．．．どうしよう．．．村が、村が．．．」

「今から取り換えしに行くんじゃないか！今から下向いてどうすんよ」

「う．．．うんっ」

レイラは既に竜の姿となっており、アルはアイラを背負っている。

もうすぐ山の入口だ。溢れる自然、畑など見慣れた景色が広がった。その畑には竜がいて、たった今小さな鳥を追いつ返しているところだった。

その鳥はもう二度とこの場には戻らないと誓うかのように、羽をばたつかせて去っていった。

少し首を回せば、あの山が見える。村を覆う山が激しく噴火するのだ。災害は目に見えている。

だが、今向かっているのは村の出口。山と山の隙間に向かって走っている。

数日前、アルがこの村の入り口として入ってきたゲートだ。

「ついに出口ね」

レイラが二人に到着を告げた。

すでにそこにはリオンとフレイの姿があった。

「遅いわよ。玉の引かれ方が強くなってきたよー！はやく、はやく行きましょっ」

「早く行かないとまずいぞ。分かってるよな、俺たちの失態は村の滅亡にと繋がってしまう。失敗は許されない」

冷静だったはずのフレイの発言からほんのわずかな熱気を感じる。全員がゆっくりと首を前に振った。

「フレイ、リオン、アイラ、アル。よし！絶対に玉を取り返しに行くわよっ！」

レイラが口を大きく開けて皆を仕切った。腕も上に挙げて張り切っている。

だが、村を出る肝心の一步が出ない。

何度も仕切りなおしては村を出ようと試みるものの、レイラの足はそれを拒むように引込んでしまう。

「・・・ほら、早く行こうよー！」

「うわっ、ふえっ・・・！やっ、やめろよぉ・・・！　　って！　　うわぁ！」

アルがレイラの背中を押した。

ついにレイラの片足が村を飛び越えたのだった。

それに続くように全員村を走りだした。

「うぉー」

雄叫びを上げ、山の城壁の向こうへと踏み出した。

アルとアイラ以外は竜の姿になり、アルとアイラが先頭を切る。

今まで一度も出たことがない地元を離れ、未成年の人竜たちは勢いよく飛び出していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0028d/>

どらごんすとりー

2010年10月13日17時23分発行